

安全な森林環境教育を目指して ～ボランティアと連携した取り組み事例から～

関東森林管理局 高尾森林ふれあい推進センター 所長 山田 徹

1 課題を取り上げた背景

当センターでは、高尾山国有林や体験施設等を活用し、年間を通じて森林環境教育に係るイベントを行っています。特に小学生を対象とした森林教室については、年間概ね約2千人（約20校）の児童を受け入れています（表1）。森林教室は、多くの児童が林内に入り体験学習を行うことから、常に安全に実施することが求められています。しかし、森林とふれあう機会が少ない児童にとっては、体験学習での新鮮さや楽しさがある反面、林内では怪我や事故などが起こり得ることを体験活動の前に分かりやすく説明し、理解してもらう必要があります。このため、児童に対し



（表1：森林教室年度別実績推移）

口頭で単に「危ない」と言うだけでなく、林内で起こり得る「注意点をイメージ」させ、児童の成長と特性を踏まえた安全対策の進め方について、ボランティア団体と連携し取り組むこととしました。

2 取組の経過

森林教室において、児童に対して林内での注意点を周知させるためには、口頭説明だけでなく、あらかじめ児童に対し、何が「危ない」のか具体的にイメージさせる必要があります。このため、林内での危険性が想定されることを写真やイラストなどを活用して視覚的に伝える方法を試みました。蜂の注意事項では、イラストとともに歩道沿いに設置した誘引トラップの中の

スズメバチを見せ、その危険性を理解してもらいます（図1）。また、森林教室をサポートしているボランティア団体に対しては、年度初期において、安全教育の指導を行い、森林教室実施時は、常にコミュニケーションを取り、安全対策の意識の向上に努めるようにしました。

3 実行結果

児童に対し、林内での注意点を写真やイラストを活用したほか、実物や実際に触れさせるなどを体験させ、視覚のほか体感でも学ぶことができたことから、具体的なイメージが伝わりやすくなりました。これにより言葉だけの注意喚起とは違い、児童はルールや危険性を強く意識するようになり、注意をよく守るようになったほか、児童同士がお互いを注意するなどの行動も見られました。また、職員とスタッフ間での児童の様子などの情報共有が速やかに共有され、安全対策に生かされるようになりました（図2）。

4 考察

林内で児童が安全に体験活動するための効果的なポイントは、

- ① 具体的な注意点を視覚により具体的に「イメージ」させること
- ② 自分の身は自分で守ることを意識させること
- ③ スタッフは児童生徒の成長の特定を学び、振り返りによるヒヤリハットや出来事などを情報共有し、安全対策を積み重ねることなどが効果的であると言えます。

引き続き、安全な森林環境教育の実施に向けてボランティアスタッフと連携しながら、より効果的な取組を進めていきたいと考えています。



（図1：説明風景）



（図2：ボランティアスタッフとの連携）